## 大間原子力発電所

# 敷地周辺及び敷地近傍の地質・地質構造 (コメント回答 その8)

# (敷地極近傍の断層の評価について)

# (補足説明資料)

### 2020年4月16日 電源開発株式会社

本資料のうち - で示す箇所は、商業機密あるいは防護上の 観点から公開不可としているもので、白抜きとしてあります。



〇「第615回審査会合」及び「第646回審査会合」での誤記に関わる対応を踏まえ、本資料にて過去の審査会合資料を引用する際の注記を 下記のとおりとする。

・右上の注記

- 再掲:過去の審査会合資料を,そのまま引用する場合 一部修正:過去の審査会合資料の内容を,一部修正する場合 誤りを修正:過去の審査会合資料の誤りを,正しい記載とする場合
- ・左下の注記

修正した誤りの内容を記載(誤りの修正がある場合)



### 〔地質·地質構造〕 2. sF断層系の形成の考え方····· 2-7 〔sF-1断層〕 3. sF-1 断層の性状······ 2-16 4. EPMA分析による曹長石化の検討······2-45 6. フィリプサイトの年代測定・・・・・ 2-50 7. X線分析の方法及び文献に基づく主要鉱物の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・2-55 8. [参考]地下深部への連続性の有無・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2-58

#### 〔sF-2断層系〕

9. sF-2断層系の性状・・・・・ 2-	-69
-----------------------	-----



下北半島西部の地質図

2-1

### 1. 大畑層の特徴及び年代について(2/6)

第700回審査会合 資料2-2-2 P.4一部修正

POWER

#### 小目名露頭(模式地)の大畑層の試料採取



試料採取位置図

 上村・斉藤(1957)<sup>1)</sup>によれば大畑層の一部層「小目名石英安山岩」は大畑川 沿いの小目名地区周辺に分布し、溶岩及び溶結凝灰岩様の岩石から成る。

• 試料採取位置の露頭はデイサイト質溶結凝灰岩から成り、肉眼で \$ 数mmの 石英粒子が多く認められる。



写真1 試料採取位置全景(赤丸:写真2)



1. 大畑層の特徴及び年代について(3/6)







1. 大畑層の特徴及び年代について(4/6)

第700回審査会合 資料2-2-2 P.6 再掲



1mm

#### 敷地の大畑層と模式地の大畑層の観察結果



写真1-1 補足調査坑試料



凡例 **写真1-2 同左実体鏡写真** Qz:石英 石英粒子が多く認められる。

 
 2mm
 写真1-3
 同左実体鏡拡大写真

 血ーニュ
 粒径2mm程度の大きな石英粒子(いわゆる算盤玉 状の結晶形を呈する)が認められる





敷地内試料と同様, 粒径3mm程度の大きな石英粒子(いわゆる算盤玉状の結晶形を呈する)が認められる。

敷地及び小目名露頭の大畑層試料の実体鏡観察によれば、両者には特徴的な結晶形を呈する石英粒子が明瞭に認められ、類似の岩相であることが分かる。



<sup>2 - 5</sup> 

1. 大畑層の特徴及び年代について(6/6)

### POWER

### 敷地の大畑層の年代測定結果



敷地の大畑層の年代測定試料採取位置

敷地の大畑層の年代測定結果

No.	岩 種 名【孔名, 深度等】	ジルコンFT年代	ジルコンU-Pb年代
1	凝灰質礫岩【Tf-6掘削面】	2.7±0.4Ma	3.00±0.14Ma
2	凝灰質礫岩【IT-22孔16.55m】	2.93±0.61Ma	3.00±0.10Ma
3	デイサイト溶岩【IT-24孔48.1-48.2m】	3.60±0.23Ma	3.56±0.06Ma
4	デイサイト溶岩【R-109孔51.0-51.5m】	3.8±0.6Ma	-
5	軽石凝灰岩【S-102孔47.4-48.6m】	3.8±0.3Ma	_

• 敷地の大畑層の年代測定を敷地の5地点の試料で実施した。
• 年代測定結果は、火山噴出物であるデイサイト溶岩及び軽石凝
灰岩では約3.6Ma~約3.8Ma, 凝灰質礫岩では約2.7Ma~約3.0Ma
となり,敷地の大畑層が鮮新世の地層であることが確認された。



2. sF断層系の形成の考え方(2/8)

第732回審査会合 資料2-2 P.2-13 一部修正



#### <u> 文献による下北半島周辺の応力場の変遷</u>





2. sF断層系の形成の考え方(4/8)

第316回審査会合 資料3-2 P.157 再掲

POWER

#### 多重逆解法解析に用いたsF-1断層データ

掘削面のsF-1断層データ

		新国市の古谷田	新国田の国政の	冬娘士侍鱼	冬绅什名		ミフフノット色
断層名	番号			木脉刀位円 (°)	木脉(八円 (°)	変位センス	ミスノイクド州
	1		00	166	10	ナサザン	10
		11	80	100	19	<u> </u>	1.3
	2	85	86	1/3	22		8.7
	3	/4	90	164	30	<u> </u>	2.0
	4	2/5	/5	5	0	<u>石                                    </u>	5.2
	5	275	86	185	5	<u> 石積すれ</u>	2.2
	6	271	84	182	7	<u>右横ずれ</u>	3.4
	7	273	82	184	8	<u>右横ずれ</u>	0.4
	8	95	85	184	8	右横ずれ	0.5
	9	93	75	181	7	右横ずれ	1.0
	10	101	73	189	7	右横ずれ	1.2
	11	96	68	184	4	右横ずれ	3.7
	12	95	68	182	8	右横ずれ	0.3
	13	95	68	183	5	右横ずれ	2.4
	14	95	68	182	8	右横ずれ	0.9
- E - 1	15	98	74	186	8	右横ずれ	0.1
SF-I	16	98	74	186	8	右横ずれ	0.1
	17	97	74	184	12	右横ずれ	4.3
	18	97	78	186	5	右横ずれ	2.8
	19	99	82	188	10	右横ずれ	3.0
	20	97	74	184	10	石構ずれ	2.3
	21	21 103 74	74	191	8	石構ずれ	0.1
	22	97	78	186	5	石構ずれ	2.8
	23	101	85	190	10	石構ずれ	4.2
	24	101	78	190	5	「石構ずれ」	2.4
	25	99	75	188	5	石構ずれ	2.9
	26	99	75	186	10	「石構ずれ」	23
	27	95	72	182	8	石構ずれ.	0.4
	28	95	78	183	10	石構ずれ	20
	29	94	75	182	8	「若権ずれ	0.1
	30	96	80	182	20	石積ずれ	12.4

解析で求められた最適応力場とのミスフィット角は小さく、sF-1断層は均一な一つの応力場において形成されたものと考えられる。

### 2. sF断層系の形成の考え方(5/8)

第615回審査会合 資料2-2 P.3-20 一部修正



#### <u>sF断層系の形成史モデル</u>



- ・ 中~後期中新世の広域応力場(最大主応力軸NE-SW方向)において、sF-1断層が右横ずれ、sF-2断層系が左横ずれの共役断層で活動した(②)。
- その後,陸化・侵食を受け,これら断層沿いに鮮新統の大畑層が堆積した(③)。sF-2断層系は大畑層堆積前に活動を終了した。
- sF-1断層はNS走向で直線性・連続性が良いことから、鮮新世の広域応力場(最大主応力軸ENE-WSW方向)でも右横ずれ運動可能であり、大畑層 堆積直後に再活動し、活動終了した(④)。
- ・ 第四紀のほぼ東西の水平圧縮応力場では、NS走向のsF-1断層は横ずれ運動を継続することは困難である(⑤)。



<u>まとめ</u>

- 掘削面,研磨面及び薄片において,条線と複合面構造の観察によりせん断センスを判定した。sF-1断層は右横ずれ,sF-2断層系は左横ずれの変位センスを示し,条線プランジ角は水平~30°南である(補足説明資料P.2-7参照)。
- 多重逆解法により推定されるsF-1断層の最大主応力軸はNE-SW方向でほぼ水平であり、文献による中~後期中新世及び鮮新世の下北半島周辺の応力場におおむね調和的である(補足説明資料P.2-9, 2-10参照)。
- 上記の変位センス及び応力場との関係の検討結果から, sF-1断層とsF-2断層系は中~後 期中新世に横ずれの共役断層として形成されたと推定され,比較的連続性のあるsF-1断層の みが鮮新世まで活動を継続したものと考えられる。
- sF-1断層は,南北走向で右横ずれセンスを示すことから,第四紀の東西性の水平圧縮応力 場での活動は生じていないものと考えられる。



東北日本弧で発生した浅発地震のメカニズム解のP軸の空間分布(小菅(1999)<sup>8)</sup>)

2. sF断層系の形成の考え方(8/8)

第615回審査会合 資料2-2 P.3-23 再掲



<u>〔参考〕現応力場の検討(敷地におけるボーリング孔の変形現象による推定)</u>



- SD-Iftic C小/小ールアレビュ/一快店により床度1093.4m~2103.0mの扎住分布を測定した。
- 複数の深度において方位90°毎に極大,極小孔径が出現するボーリング孔の変形現象を確認した。
- 孔径の変形から推定される水平最大圧縮軸は、そのヒストグラムの分布から東西方向であると判断される。



### (余白)









土壌硬度計測定及び針貫入試験結果から、軟質岩塊①・②は大畑層の凝灰質礫岩の基質部と同程度の硬さの凝灰岩である。
 軟質岩塊は大畑層の基質部と類似した物性を示し、基質部と共に塑性的な変形が可能であったと考えられる。



### (余白)





1 金川(2011)11)を左右反転

2-22





### (余白)















100



写真2 拡大写真(34.60m~35.00m)








R<sub>1</sub>: Yに対してPとは反対方向に斜交し, Pを 切断・屈曲させる面

金川(2011)11)を左右反転







デイサイト溶岩と粘土状破砕部の境界の主せん断面は薄片観察により,シャープな最新面であることを確認した。

注)薄片は裏面作製のため反転して表示。



# (余白)

### 3.sF-1断層の性状(23/26)

第732回審査会合 資料2−2 P.2-6 再掲



#### <u>sF-1断層北方の音波探査断面(1/2):No.111SM測線位置</u>









- 海底地形調査によると, sF-1断層は少なくとも根田内までは延長しないことは確認しているが, さらに沖合の音波探査測線の探査記録断面を確認した。
- 音波探査記録によれば, sF-1断層の北方延長には, D層及びE層が分布し, 断層は分布しない。



※:「大間崎背斜」の詳細は, 第732回審査会合 資料2-1「7.3 中新世背斜・向斜」を参照。







### 4. EPMA分析による曹長石化の検討(2/4)

第615回審査会合 資料2-2 P.3-51 一部修正



#### ST-BL2



ST-BL2 元素マップ(Ca)

### 4. EPMA分析による曹長石化の検討(3/4)

第615回審査会合 資料2-2 P.3-52 一部修正

2-47 POWER

<u>IT-10</u>





4. EPMA分析による曹長石化の検討(4/4)

横軸目盛り」及び「ST-BL2の凡例」を修正した。

2-48

第615回審査会合 資料2-2

P.3-53 一部修正, 誤りを修正

# 5. 大間周辺の隆起傾向



第817回審査会合 資料1-1 P.7-3 一部修正



#### <u>隆起速度分布(旧汀線による)\*1</u>



## 6. フィリプサイトの年代測定(1/5)

第615回審査会合 資料2-2 P.3-47 一部修正

# POWER

2-50

## <u>年代測定試料の選定</u>



6. フィリプサイトの年代測定(2/5)

#### <u>試料の薄片観察結果</u>

IT-24孔(72m~75m区間)



年代測定試料の薄片観察の結果,年代測定試料にはフィリプサイトが多量に含まれる。フィリプサイトは大畑層 の火山円礫岩の基質部中に自生し,礫に生じた割れ目にはフィリプサイト脈として分布する。 POWER

6. フィリプサイトの年代測定(3/5)

#### <u>試料のX線分析結果</u>



年代測定試料のX線分析結果(不定方位分析)

POWER

6. フィリプサイトの年代測定(4/5)

# POWER

2-53

#### フィリプサイトのK-Ar年代測定の方法

#### 1. フィリプサイトの分離

- (1)火山円礫岩の基質部のフィリプサイト濃集部を削り取り粉砕する。
- (2) 超音波洗浄機で攪拌後一昼夜放置し,水ひ法により直径10μm以下の粒子を含む懸濁液上部を採取する。
- (3) (2)で得られた懸濁液を遠心分離器 (HITACHI製 [himac CT 5L]) にかけて直径0.2 μ m以下の粒子を回収する。設定条件は3,000回転/分, 14分40秒間とする。
- (4) (3)で得られた沈殿物(直径0.2µm~10µmの粒子)について、以下の方法により試料に付着している塩素分を除去するため、沸騰させた 脱イオン水を加え、超音波洗浄器で攪拌後、遠心分離器(3,000回転/分,20分間)にかけ、上澄みを捨てる。以上の洗浄操作を10回繰り返す。
  (5) (4) で脱塩処理した沈殿物を70℃の恒温槽内で十分に乾燥させ年代測定用試料とする。
- 2. X線分析
  - 分析には岡山理科大学自然科学研究所のX線回折分析装置(X線回折装置RINT2500V)を用いた。
  - ターゲット: Cu(K a), 管電圧: 40kV, 管電流: 160mA
  - 拡散スリット・散乱スリット:1°, 受光スリット:0.15mm
  - •スキャン範囲:3°~70°,サンプリング幅:0.02°,スキャン速度:8°/分
- 3. カリウムの定量分析

炎光分光法により検量線を用いてカリウムの定量を行った。分析には岡山理科大学自然科学研究所の日立180-30型原子吸光・炎光分光 分析装置を用いた。試料の不均質さや定量の再現性を確認するため、1試料につき2回以上の分析を行い、その平均値を年代計算に使用 する。再現性は、(分析結果の差)/(分析結果の平均値)×100である。

4. アルゴン同位体比の測定

岡山理科大学自然科学研究所のアルゴン専用の質量分析計(HIRU)を用い, 38Arをトレーサー(スパイク)として, 試料から抽出されるアルゴンと混合させる同位体希釈法により定量。

分析機関:株式会社蒜山地質年代学研究所

### <u>年代測定結果</u>

年代測定試料	測定鉱物	カリウム含有量*	放射性起源 <sup>40</sup> Ar	K−Ar年代	非放射性起源 <sup>40</sup> Ar
	(粒径)	(wt%)	(×10 <sup>-8</sup> ccSTP/g)	(Ma)	(%)
IT-24孔 深度72.68m~72.75m	フィリプサイト (0.2 μ m~10 μ m)	$4.400 \pm 0.088$	27.3±2.1	$1.60 \pm 0.13$	81.4

\*:X線分析で検出された斜長石やスメクタイトのカリウム含有量はフィリプサイトに比較して十分少なく(補足説明資料P.2-56参照), 回折線の強度も小さいため(補足説明資料P.2-52参照),カリウムはほぼすべてフィリプサイトに含まれているものと考えられる。

- IT-24孔の深度72.68m~72.75mの年代測定試料のフィリプサイトのK-Ar法年代は約1.6Maである。
- このフィリプサイトの年代値は、その生成温度と現在の地温分布からフィリプサイトが後期更新世より十分古い時期に生成したと推定されることと整合的である。



# POWER

2-55

#### <u>試料調整とX線分析条件</u>

#### (1)不定方位法回折試験

試料を乾燥機において 60℃以下で 12 時間以上乾燥させた後,振動ミル(平工製作所製 TI100:10ml 容タン グステンカーバイト容器)を用いて粉砕・混合し,粉末試料(200mesh,95%pass)とする。粉末試料は,X線回折 用アルミニウムホルダーに充填し,不定方位試料を作成する。作成した不定方位試料は,X線回折測定装置を 用いて以下の条件で測定する。

装置:理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit:1°			
Target: $Cu(K\alpha)$	Scattering Slit: 1°			
Monochrometer:湾曲 Graphite	Recieving Slit: 0.3mm			
Voltage: 40KV	Scanning Speed: 2° /min			
Current: 40mA	Scanning Mode:連続法			
Detector:SC	Sampling Range:0.02°			
Calculation Mode: cps	Scanning Range: $2 \sim 65^{\circ}$			

#### (2)定方位および EG 処理定方位回折試験

上記の粉末試料を用いて純水による簡易水ひを行い、懸濁液をシリコン単結晶板上に無限厚さを保つよう に塗布し、乾燥させて定方位試料を作成する。Scanning Range を 2~30°(20)とする他は不定方位法回折 試験と同一条件で回折試験を行う。さらに、定方位法に用いた試料を EG(エチレングリコール)処理した後、2 ~20°の Scanning Range について再度、定方位法と同一条件でX線回折を行う。

分析機関:パリノ・サーヴェイ株式会社

## 7. X線分析の方法及び文献に基づく主要鉱物の特徴(2/2)

# POWER

2-56

#### X線分析及び薄片観察に関わる主要鉱物の特徴

鉱物名	粉末X線回折分析での特徴的回折ピーク (ICDD (2015) <sup>12)</sup> による)			文献による光学的性質	
[化学式]	相対強度	2 θCuKα (deg.)	備考	屈折率*1	複屈折* <sup>2</sup>
石英	100 (第一強線)	26.65	low_guortz	1 544 ~ 1 552*3	0.009* <sup>3</sup>
[SiO <sub>2</sub> ]	22(第二強線)	20.85		1.044 00 1.000	
	100 (第一強線)	27.82	labradorite <sup>*4</sup>	1.554 ~ 1.582* <sup>5</sup>	0.007 ~ 0.011* <sup>5</sup>
[(Ca <sub>x</sub> , Na <sub>1-x</sub> ) Al <sub>1+X</sub> Si <sub>3-X</sub> O <sub>8</sub> ]	59 (第二強線)	21.95			
スメクタイト	100 (第一強線)	5.9-6.5	montmorillonite	1.48 ~ 1.64* <sup>3</sup>	0.010 ~ 0.040* <sup>3</sup>
[(Na,Ca) <sub>0.33</sub> (Al,Mg)₂Si₄O <sub>10</sub> (OH)₂∙nH₂O]	18-80 (第二強線)	19.7-19.8	14Å-15Å		
	パサイト 48 *6	12.44 <sup>*6</sup>	phillipsite – K <sup>*6</sup>	1.451 ~ 1.470* <sup>7</sup>	0.002 ~ 0.004* <sup>7</sup>
$[(K, Na, Ga_{0.5}, Ba_{0.5})_X (AI_x SI_{16-x} O_{32}) \cdot 12H_2O]$	30 * <sup>6</sup>	17.57* <sup>6</sup>			

\*1:鉱物の屈折率が試料固定樹脂の屈折率に近い場合,オープンニコル下では鉱物周辺の明るい輪郭が弱く見え,両者の屈折率の差が大きい場合は,明瞭に見える。

\*2:鉱物の複屈折が低い場合、クロスニコル下ではステージを回転※させても暗黒色のままであり、高い場合は回転すると明るい色調で明瞭に変化する。

(※:ステージ回転で鉱物に対する観察光の振動方向が変化し、鉱物の色調が変化する。これを干渉色という。)

\*3:都城·久城 (1972)<sup>13)</sup>の屈折率及び複屈折。

\*4: EPMA分析によると, sF-1断層の粘土状破砕部の斜長石は曹灰長石~亜灰長石である(補足説明資料P.2-48参照)。

\*5:都城·久城 (1972)<sup>13)</sup>の曹灰長石 ~亜灰長石。

\*6:ICDD(2015)<sup>12)</sup>のphillipsite-Kの回折ピークのうち,斜長石と重複しない主要回折ピークの位置。

\*7: Sheppard and Fitzpatrick(1989)<sup>14)</sup>のK・Na・Si に富むフィリプサイト。

- X線分析:フィリプサイトと他の鉱物とは回折ピークの位置で識別可能である。
- 薄片観察:屈折率及び複屈折からフィリプサイトと他の鉱物とは識別可能である。特に複屈折が他の鉱物に比べて非常に小さいこ とが特徴である。



# (余白)







2-58

#### <u>反射法地震探査統合解析:測線位置</u>



#### 8. [参考]地下深部への連続性の有無(2/11)





# 反射法地震探査統合解析:データ取得仕様

調査項目/測定諸元	ベイケーブルB102測線(1998年)	反射法EW測線(2013年)				
発震種別	エアガン発震	P波発震				
測線長	1.26km	1.845km				
発震系パラメータ						
震源	エアガン	大型バイブレータ				
エアガン容量/バイブレータ台数	80 cu.in.	2台				
標準発震点間隔(発震位置)	10m	10m				
スイープ長	-	20 sec				
標準発震回数/発震点	1回	5回				
スイープ周波数	-	8-70Hz				
エアガン深度	1.5m	-				
バイブレータアレイ長	-	8m(B-B)				
総発震点数	115点	168点				
受振系パラメータ						
受振点間隔	10m	5m				
受振器種別	OBC(ハイドロフォン)	3成分受振器(MEMS型加速度計)				
受振器数/受振点	1組	1組				
展開パターン	移動展開	固定展開				
展開長	1.08km	1.845km				
受振点数	108点	370点				
記録系パラメータ						
サンプルレート	1msec	2msec				
チャンネル数	60(移動)	370(固定)				
相互相関	-	CAS				
記録長	4sec	6sec				

#### 8. 〔参考〕地下深部への連続性の有無(3/11)





#### 反射法地震探查統合解析:解析仕様(2018年)

	データ処理パラメーター覧表(1)				データ処理パラメーター覧表(2)	
処理項目	パラメータ項目	パラメータ		処理項目	パラメータ項目	パラメータ
1 フォーマット変換		SEGYフォーマットからSUPERXフォーマットヘ変換	10	CMPデータ編集	ビンサイズ	2.5 m
2 測線情報セット					CMP制限	none
3 最小位相変換	ターゲット	バイブレータデータ	11	速度解析	手法	定速度重合法
4 屈折初動解析					解析間隔	50 m
5 静補正	手法	屈折法解析	12	NMO補正	ストレッチファクター	2.1(EW4),1.8(B102A)
	インバージョン	タイムターム法	13	3 21-1	手法	マニュアル
	発震点における表層速度	800 m/sec			解析間隔	Variable
	受振点における表層速度	800 m/sec	14	残差静補正	最大タイムシフト量	6, 4 msec
	表層基底層速度	2500 m/sec			タイムゲート	100-600 msec
	標高補正速度	表層基底層速度			プレフィルター	15/20 - 65/70 Hz
6トレース間内挿					スタートCMP No.	200(EW4),350(B102A)
※B102A測線のみ			15	トレースバランシング	手法	AGC
7 ノイズ抑制(線形ノイズ抑制)	処理領域	共通発震点領域			AGCゲート長	100 msec
	オペレータモード	reject	16	リサンプル	サンプリング間隔	1msec -> 2msec
	オペレータ長	11 traces		※B102A測線のみ		
	速度範囲	-3000 ~ 3000 m/sec	17	東西測線とB102A測線の結合		
	ターゲット周波数	0/2 ~ 60/65 Hz	18	重合前時間マイグレーション	手法	共通発震点領域におけるキルヒホッフ時間
	前処理	静補正処理、NMO補正、AGC適用				マイクレーション
	AGCゲート長	300 msec			速度解析間隔	50 m
8 振幅補償	手法	AGC	19	CMP重合	手法	CMP重合
	AGCゲート長	600 msec	20	バンドパスフィルター	オペレータ長	960 msec
	ケートスライティング速度	2500 m/sec			通過帯域	25/30 - 50/60 Hz
9 デコンボリューション	手法	スパイキングデコンボリューション	21	周波数-空間予測フィルター	オペレータ長	7 CMPs
	モード	Non Time Variant			ゲート長	49 CMPs
	ゲートスタートタイム	200 msec(EW4),0 msec(B102A)			時間ゲート長	500 msec
	ゲート長	3000 msec(EW4),1000 msec(B102A)			オペレータタイプ	Two-Side
	オーバーラップ長	-			時間ゲートオーハーラップ長	375 msec
	オペレータ長	300 msec(EW4),100 msec(B102A)	22	2]深度変換	基準面	平均海水面
	予測距離	2 msec(EW4),1 msec(B102A)				
	ゲートスライディング速度	2500 m/sec(EW4),1500 m/sec(B102A)				
	ホワイトノイズ	0.50%				

8. [参考]地下深部への連続性の有無(4/11)





#### 反射法地震探查統合解析:重合数分布



8. 〔参考〕地下深部への連続性の有無(5/11)

第732回審査会合 資料2-1 P.2-24 再掲



反射法地震探査統合解析:統合解析フロー





8. [参考]地下深部への連続性の有無(6/11)

第732回審査会合 料2-1 P2-25 再現





したがって、sF-1断層の下方延長部では鍵層AT-22及び玄武岩上面に変位はほとんど認められないことから、sF-1断層は地下深部に連続する断層ではないと判断される。





- 補足説明資料P.2-65に示す深度断面図の玄武岩上面の反射面トレースを瞬間振幅断面図(エンベロープ)に重ねると、その反射面 沿いの反射強度が顕著に大きいことが分かる。
- 瞬間振幅の強度は、地層境界等の音響インピーダンスコントラストを示しており、地層境界のうち大間層と玄武岩のインピーダンスコントラストが最も大きいと考えられることから、深度300m~400m付近に見られる強い反射面は玄武岩上面であると判断される。







#### 反射法地震探查統合解析:探查精度



- ・ 反射法地震探査の鉛直方向の探査精度として、反射面の分解能(R)は、Rayleigh基準によりR=Vp/4f で求まる(Vp:P波速度、f:周波数)。
- ・ 瞬間周波数断面図により, sF-1断層(CDP450)付近の深度150m以深の卓越周波数はおおむね30Hz~40Hzである。また, 当該領域のP波 速度(Vp)は1.77km/sec~2.06km/sec\*である。
- したがって, 鉛直方向の分解能は10m~20m程度と推定され, 補足説明資料P.2-65に示すsF-1断層の見掛けの鉛直変位量約40mは捉えられると判断される。





#### <u>まとめ</u>

- sF-1断層と直交する東西測線の既往反射法地震探査データを用いて再解析を行った。再解析で得られた深度断面,近傍の既往ボーリング調査及び追加で実施したIT-66-e孔のデータを用いて解釈図を作成した。
- 反射法による深度断面では深度100m~140m付近及び300m~400m付近に強い反射面が認められ,ボーリング調査からそれぞれ大間層上面及び玄武岩上面と判断される。
- sF-1断層は、反射法による深度断面では、CDP450付近で高角傾斜で下方に延び、大間層上面で西側落下の約40mの見掛けの鉛直変位量が認められるが、深度150m付近以深には明瞭な不連続線は見られず、その延長上の玄武岩上面にも変位は認められない。鉛直方向の分解能は10m~20m程度と推定されることから、 sF-1断層の見掛けの鉛直変位量約40mは捉えられると判断される。
- IT-66-e孔では、深度150m付近\*でsF-1断層を確認した。また、同孔の深度280m付近\*で確認した大間層の 鍵層(AT-22)は、付近のボーリングとの関係から、sF-1断層の下方延長部を挟んだ両側でほぼ水平に分布す るものと判断される。

sF-1断層の下方延長部では,鍵層AT-22及び玄武岩上面に変位はほとんど認められないことから, sF-1断層は地下深部に連続する断層ではないと判断される



sF-1断層は震源として考慮する活断層に該当しない



研磨片及び薄片によると、最新ゾーンの複合面構造は左横ずれセンスを示す。


参考文献



- 1. 上村不二雄・斉藤正次(1957):5萬分の1地質図幅「大畑」及び同説明書,地質調査所,40p.
- 2. 戸田成太郎・大場司・小林淳・林信太郎(2011):下北半島中部に分布する大畑層の地質,日本地質学会第118年学術大会・日本鉱物科学会2011年年会合同学術大会講 演要旨集(セクションC), P.37
- 3. 梅田浩司・檀原徹(2008):フィッション・トラック年代によるむつ燧岳の活動年代の再検討,岩石鉱物科学, vol.37, pp.131-136
- 4. 青森県(1998):青森県の地質, p.105
- 5. 大槻憲四郎(1989):鉱脈による新第三紀東北本州弧の造構応力場復元,地質学論集,第32号, pp.281-304
- 6. 山元孝広(1991):日本列島の後期新生代岩脈群と造構応力場,地質調査所月報,第42巻,第3号,pp.131-148.
- 7. Sato Hiroshi (1994) : The relationship between late Cenozoic tectonic events and stress field and basin development in northeast Japan, Journal of Geophysical Research, vol.99, pp.22,261-22,274.
- 8. 小菅正裕(1999):地殻内地震から見た東北日本の応力配置,月刊地球,号外No.27, pp.107-112.
- Yamaji, A., Sato, K. and Otsubo, M. (2011): Multiple Inverse Method Software Package (ver.6) http://www.kueps.kyoto-u.ac.jp/~web-bs/tsg/software/mim/
- 10. 小菅正裕・渡邉和俊・橋本一勲・葛西宏生(2012):2011年東北地方太平洋沖地震後の東北地方北部での誘発地震活動,地震,第2輯,第65巻,第1号, pp.69-83
- 11. 金川久一 (2011):現代地球科学入門シリーズ10,地球のテクトニクスⅡ 構造地質学,共立出版.p.109.
- 12. ICDD (2015): PDF-4+ 2015 (Database), edited by Dr. Soorya Kabekkodu, International Centre for Diffraction Data, Newton Square, PA, USA.
- 13. 都城秋穂・久城育夫(1972):岩石学 I 偏光顕微鏡と造岩鉱物, 共立出版, 219p.
- 14. Sheppard, R.A. and Fitzpatrick, J. J. (1989): Phillipsite from silicic tuffs in saline, alkaline-lake deposits. Clays and Clay Minerals, vol.37, no.3, pp.243-247